

水稲「星の光」の収穫時期について

1 試験のねらい

昭和57年に本県奨励品種に採用された「星の光」は、近年問題になっている縞葉枯病に対する抵抗性品種で、県南部晩植での作付が急激に増加している。しかし、星の光は刈り遅れると品質が低下しやすい傾向があるため、晩植での収穫時期について昭和57～58年度の2か年検討した。

2 試験方法

本場内厚層多腐植質多湿黒ボク土の水田に、6月4日(昭57)及び6月17日(昭58)に移植した星の光について調査を行った。移植は稚苗を用い、 m^2 当たり2.2株(昭57)及び2.3.8株(昭58)、1株4本植で、施肥は窒素0.4、りん酸0.6、加里0.5 kg/aを基肥に施用し、その他の栽培管理は当場の慣行に従った。

調査方法は、昭和57年度は出穂後39日以降7回、昭和58年度は出穂後40日以降5回、調査日ごとに平均的な生育の5株を抜き取り自然乾燥後、籾水分、帯緑色籾率、登熟歩合及び玄米諸特性について調査した。

3 試験結果及び考察

調査対象の星の光の出穂期は、昭和57年が8月23日、昭和59年は9月1日であった。

籾水分は出穂後漸減し、出穂後55日頃には機械収穫可能な25%以下となり、その時の帯緑色籾率は昭和57年が1.4%、昭和58年は1.5.4%であった。帯緑色籾率は出穂後55日頃を過ぎると減少割合が緩やかになった。

登熟歩合は日数の経過とともに高まり、それに伴い千籾当たり玄米重もかなり後まで緩やかながら増加する傾向がみられ、出穂後70日頃が最高収量となった。

玄米特性は、青米が漸減してゆくのに対して、うす茶米は早い時期からみられ昭和57年は出穂後47日に5.6%、昭和58年は出穂後48日に3.5%あり、出穂後55日以降は急増する傾向がみられた。胴割米は出穂後54～61日以降多くなる傾向があった。

積算温度は、両年とも低温・日照により登熟期間は長く、昭和57年は出穂後54日で1,000℃を越え、61日には1,200℃で、昭和58年は55日で1,021℃、69日で1,193℃であった。

以上のように、収量は出穂後70日頃が高い。しかし、うす茶米及び胴割米は出穂後55日頃から急増する傾向がみられ、出穂後70日頃の収穫は品質の低下が大きい。したがって、品質向上の点から収穫時期は出穂後60日頃、積算温度で1,100℃程度が目安と考えられ、帯緑色籾率は10%程度が適期と考えられる。

4 成果の要約

晩植での星の光の収穫時期を把握するために、籾及び玄米の諸特性について検討した結果、6月上・中旬植の星の光の収穫時期は、帯緑色籾率が10%程度になった頃が良品質の米を収穫できる時期と考えられる。

(担当者 作物部 大和田輝昌 栃木喜八郎 山口正篤)

表-1 出穂後経過日数と諸特性の推移

調査年月日	出穂後日数	籾水分%	帯緑色籾率%	玄米重 g		屑米重歩合%	登熟歩合%	玄米千粒重g	
				株当たり	1000籾当たり				
昭和57年度	10. 1	39	—	59	185.8	16.54	14.5	78.0	21.9
	9	47	29.5	30	202.0	18.08	9.8	83.1	22.1
	16	54	23.9	14	206.7	18.45	9.1	86.9	22.0
	23	61	16.5	8	212.5	18.71	9.5	87.8	21.9
	28	66	16.5	6	214.6	19.13	7.8	88.9	22.0
	11. 4	73	14.3	4	217.8	19.35	7.0	89.6	21.9
13	82	—	1	218.6	19.21	6.8	89.1	22.0	
昭和58年度	10.11	40	28.9	70.7	—	—	—	—	—
	19	48	27.3	50.7	180.3	17.37	6.48	77.2	21.7
	26	56	21.7	15.4	198.0	18.50	6.01	82.7	22.1
	11. 2	61	17.1	13.6	209.8	19.17	4.40	85.6	22.1
	10	69	—	2.8	190.7	19.60	3.95	85.9	22.1

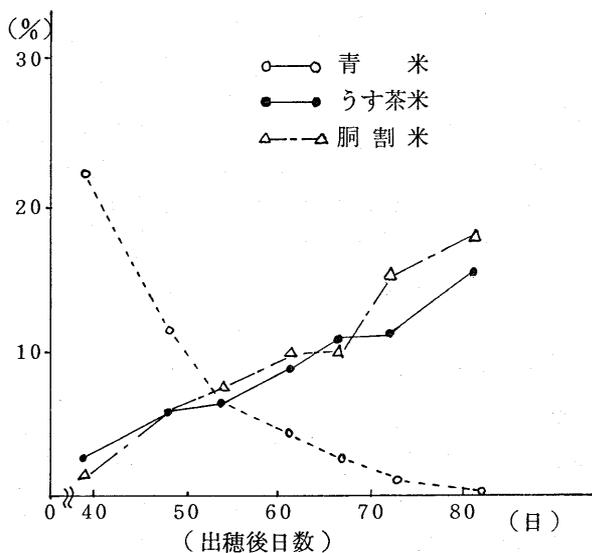


図-1 玄米性状の推移(昭57)